

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 15 日現在

機関番号：32633

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792561

研究課題名(和文) 看護師の行うモーニングケアの実態調査：術後回復を促すモーニングケアの導入にむけて

研究課題名(英文) The survey of the morning care by nurses in Japan: Aim at clinical introduction of the morning care which promotes postoperative recovery

研究代表者

大橋 久美子(OHASHI, KUMIKO)

聖路加国際大学・看護学部・助教

研究者番号：40584165

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の看護師が行っているモーニングケアの実態を明らかにし、術後の回復に効果的なモーニングケア(快適起床ケア)を臨床に導入するプログラムの検討を目的として行った。全国調査の結果、整形外科病棟におけるモーニングケアは主に看護師によって朝に実施されているが、歯磨き道具とおしぼりの配布という内容に簡略化されていることが明らかとなった。調査結果をもとに看護職者と交流会を行い、不足内容と実施上の困難点について討議し、快適起床ケアを臨床に導入するためのプログラムを考案した。今後の課題は、プログラムをより具体化して臨床への導入を進めていくことである。

研究成果の概要(英文)：The research purpose is to clarify the actual condition of the morning care which nurses perform in Japan and to consider the program which effectively introduces morning care named as Comfort upon Rising Care for postoperative recovery into clinical setting. The result of a national survey is the following. First, morning care in the orthopedics ward is mainly carried out by nurses at the early morning. Second, the care contents are simplified by preparation of a tooth brushing tool and a steamed towel. At the review meeting with nurses and nursing teachers based on the result of this survey, insufficient contents and operational difficult points were discussed. Then the program for introducing a Comfort upon Rising Care into clinical setting was designed. The next step is making this program more concrete and introducing this into clinical setting.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：モーニングケア 看護技術 術後回復

1. 研究開始当初の背景

従来のモーニングケアは早朝に行う基本的な日常生活援助として「口腔内の清潔、洗面、清拭、結髪、寝衣交換、必要に応じてベッド・メイキングまたはシーツ交換等¹⁾」の多様な内容と方法で丁寧に行われてきた。しかし現在、モーニングケアという用語は洗面介助の同義語²⁾とされ教科書の記載もなくなる傾向がある。一方、病院などの臨床現場では朝の業務量の増加³⁾や看護師のモーニングケアの重要性に対する認識の低下⁴⁾が指摘されており、モーニングケアは「おしぼりとコップ一杯の水⁵⁾」へと簡略化される傾向がある。こうした状況から、患者が基本的な日常生活援助でさえも十分に受けていないことが推測される。基本的なモーニングケアの衰退は看護の質の保証を揺るがす看護界の危機的状況であり、患者のQOLの低下につながる問題である。そのため、現状を明確に把握し、必要な対策を講じなければならないと考える。

研究者は、ベッド上安静中の整形外科患者11名に対するインタビューを行い、「夜の環境からの解放」「朝の生活習慣」「今日の予定の把握」「今朝の身体状態把握」「朝の気分調整」という早朝ならではの援助ニーズを明らかにした⁶⁾。その後、活動性の向上を目的に援助ニーズに対応したモーニングケア(快適起床ケア)を再構築し、その効果を検証してきた。このケア内容は、普段の毎朝の習慣に近づけて洗面の際にお湯を使って顔や手を洗うことや、不確かな入院生活において朝から一日の予定の説明や今日の過ごし方への助言を行うことなどを含めた、朝の支度を充実させる内容である。生活行動に援助を要する整形外科の術後患者において、現状のタオルとかがい道具の配布である簡略化したケアを受けた比較群36名と充実したケアを受け

た介入群36名の反応を比較したところ、介入群で快適感や活力などの気分と朝食行動が促進し、なかでも朝食摂取率が有意に増加した(比較群63.1%,介入群92.8%, $p=0.000$)⁷⁾。患者の援助ニーズに丁寧に対応したモーニングケアが臨床に普及されれば、術後回復を促進し、医療費抑制に貢献する点で社会的意義もあると考える。なによりも、患者が入院や手術によって損なわれた日常性や自分らしさを取り戻しながら主体的に入院生活を再構築していくことにつながり、QOLの向上に寄与すると考える。

今後、患者の回復に効果的なモーニングケアを臨床に導入するにあたって、実際にモーニングケアとして何がどのように提供されているのかを知る必要があるが、モーニングケアの実態は全国的に調査されておらず、現状が不明である。

<引用文献>

- 1) 内園耕二他監,井出千束他編(1992).看護学大辞典(第5版).2102.メヂカルフレンド社.
- 2) 日本看護科学学会看護学術用語検討委員会(2005).看護行為用語分類看護行為の言語化と用語体系の構築.107.日本看護協会出版会.
- 3) 牛込三和子(1982).基本的ケアの実態と問題点 - モーニングケアからイブニングケアまで -.看護実践の科学.7(2).26-44.
- 4) 得田恵子(1993).看護婦の認識と業務の多忙度がモーニングケアに与える影響について.日本看護学会第4回集録看護管理.95-98.
- 5) 川島みどり(1997).「療養上の世話」の変遷 たかがモーニングケアというなかれ.看護学雑誌.61(7).686-689.
- 6) 大橋久美子(2008).床上安静中の入院患者の朝の生活の構造.聖路加看護学会

誌.12(1).9-17.

7)大橋久美子(2010).術後急性期患者の生活リズムの自然回復を促進させるモーニングケアの開発 歩行介助を要する整形外科患者に対する効果 .2009 年度聖路加看護大学博士論文.

2. 研究の目的

本研究は、臨床の看護師が行っているモーニングケアの実態を全国的に明らかにし、術後回復に効果的な活動性を高めるためのモーニングケア(快適起床ケア)を臨床に導入する際の課題を検討し、さらには臨床への導入プログラムについて考案することを目的として行った。

3. 研究の方法

(1) モーニングケアの全国調査

まず、看護師が術後患者に行っているモーニングケアの実態(内容、ケア提供者、実施時間帯、所要時間、ケアに対する認識、教育背景等)を全国規模で把握した(研究1)。2012年11月~2013年3月、整形外科病棟の看護師を対象に無記名の自記入式調査用紙を用いた留め置き調査を実施した。病院管理者に研究協力の有無を確認し、了解の得られた病院290箇所へ調査用紙を各5部郵送した。質問項目は計33項目であり、病棟のモーニングケアの実情9項目(実施の有無、時間帯、ケア提供者等)、回答者のモーニングケアに対する意識と実践13項目(目的、内容、重要性、満足度、阻害要因等)、属性11項目である。分析は、項目毎に単純集計を行った。倫理的配慮として、文書により研究の目的と方法を説明し、回答者の任意性と匿名性の確保を行った。研究者所属機関の研究倫理審査委員会の承認(12-(簡)-005)を得て実施した。

(2) 看護職者との交流会

全国調査の結果をもとにモーニングケ

アの実態とその背景について看護職同士で話し合う交流会を開き、研究者が開発している活動性を高めるモーニングケア(快適起床ケア)の臨床への導入方法について考察を深めた。

(3) 快適起床ケアの導入プログラム考案

全国調査から把握したモーニングケアと快適起床ケアとの内容を比較し、現在の実施状況から、不足内容と実施上の困難点を明確にし、快適起床ケアの導入プログラムを考案した。

4. 研究成果

(1) モーニングケアの実態

全国調査において、調査用紙は1321部(回収率91.1%)回収し、有効回答率100%であった。回答者の年齢は、20代29.2%、30代31.7%、40代26.8%、50代以上11.9%であった。モーニングケアを「病棟で実施している」は93.3%であり、実施のタイミングは「起床後57.6%」「朝食後47.2%」「朝食前45.6%」等であった。慢性期の患者へのケア提供者は「受け持ち看護師62.3%」「受け持ち以外の看護師41.3%」「看護助手37.0%」等であった。目的は「清潔93.2%」「生活リズムの調整75.6%」「精神的側面(快適感/活力)62.5%」「朝食の準備60.2%」等であり、モーニングケアと認識している内容は「顔や手を拭く90.0%」「歯磨き87.4%」「挨拶76.2%」「採光73.9%」「朝食の準備73.4%」等であった。モーニングケアへの認識は「非常に重要49.1%」「まあまあ重要43.6%」であり、ケアの満足度は「どちらともいえない41.8%」「あまり満足していない29.3%」等であった。

こうした結果から、整形外科病棟におけるモーニングケアは主に看護師によって朝に実施されているが、内容は簡略化されているという実情が明らかになった。また、看護師は重要性を感じているが満足度のいくケアではない様子が伺える。今後はモーニングケア

の目的や内容に関する看護師への教育や、時間内で満足に行える看護体制のあり方を検討していく必要がある。

(2) 看護職者との交流会

全国調査をもとにモーニングケアの実態とその背景について看護職同士で話し合う交流会を開いた。参加者は計15名であった。調査結果について、参加者の経験と比較しながらモーニングケアの現状について話し合われ、調査結果に妥当性があることが確認された。さらに、今後、研究者が開発した快適起床ケアを臨床に導入する際には、看護師に対して、ケアの意義と目的に関する明確な説明と具体的なケア内容の提示が重要であるといった示唆が得られた。

(3) 快適起床ケアの導入プログラム考案

快適起床ケアと全国調査におけるモーニングケアの内容を比較した結果、70%以下の実施率であったものは、一日が始まる環境づくりに関連する生活環境の整理整頓と、苦痛の緩和、活動に向けた身体的準備に関連する体位調整・歯磨きとタオルで顔や手を拭く以外の身支度、今日の生活の見通しを立てるといった内容であり、これらが現在の不足内容であることが明らかになった。

全国調査の結果と交流会での討議をもとに、快適起床ケアを臨床に導入するためのプログラムとして、下記～が考案された。

モーニングケアの意義と目的に関するわかりやすい説明

看護師自身がモーニングケアをどのように意識しているかが重要であり、「朝を創る」という目的や意義をまず明確に説明する必要がある。例えば、快適起床ケアを実施するには「清潔」という目的や「口腔ケア」といった内容を説明するだけでは、朝に実施されない可能性が高い。快適起床ケアにおける口腔ケアは「食事の前に行ううがいや歯磨き」であり、それによって覚醒が促され、口腔内がさっぱりして食事への意欲がわき、さらに

朝食摂取量の増加につながるということ、モーニングケアとして看護師に伝えていく。

ケア要素と個別的なケア内容の提示

快適起床ケアは基盤となるケア要素が重要である。ケア要素を意識して実施しながら、さらにその日の朝の患者の状態をアセスメントしながら、患者に合わせた個別的なケア内容をカスタマイズして実施するように説明する必要がある。また、実施する病棟や科の特徴を踏まえて、具体的な内容や方法を事前に示す必要がある。

ケアの実際の流れのイメージ化

快適起床ケアの項目リストだけでは、どのような流れでどう行おうかがイメージできず実施しづらい。流れをイメージしてもらうために事前に患者モデルを用いモーニングケアの実際の様子を看護師に見せるといった教育方法も重要である。

(4) 今後の課題

今後、プログラムをより具体化して臨床への導入を進めていきたい。しかしながらプログラムの要素であるモーニングケアの意義と目的や内容については、学生時代に基礎教育機関でどの様にモーニングケアを教わってきたかということも看護師の理解に影響すると考えられる。よって、現在の看護の基礎教育機関におけるモーニングケアに関する教育の実態を書きらかにする研究が必要と考え、この件についても探求していく。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計1件)

大橋久美子. 整形外科病棟におけるモーニングケアの実態に関する全国調査. 第18回 聖路加看護学会学術集会. 2013/9/28. 聖路加国際大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大橋 久美子 (OHASHI, Kumiko)
聖路加国際大学・看護学部・助教
研究者番号: 40584165